



目次

◆研究

森林借款問題

◆隨筆

視察雜感

樞陞より

◆文苑

向上村へ

渡南日記

◆雜報

學校便り

會員消息

其他

〔1〕 日五廿月八年七正穴 號六百第 日四十月六年四十四治明 日五廿月每 行發期定

研究

森林借款問題

於吉林 川口生

人も知る支那は吉林黒龍兩省の森林鑛山を擔保に日本から三千萬圓を借款して、段内閣の宿望たる西南討伐費用に當てる財政救濟方法が案出されて過ぐる日調印が濟んだ其借款條文(公報せざるもの)

甲1、日金三千萬圓

2、利率七厘五

3、償還期間五ヶ年

4、手取全部

5、中國吉林黒龍兩省の植木鑛産を以て擔保品とす

6、中日は應仁公司を組織して吉林、黒龍兩省の植木鑛産の利源を開拓すべし

乙1、中日が吉林黒龍兩省に採伐植木及開鑛の公司を設立する時は、今回借款關係の銀行をして其資金の半を引受くるものとす。

2、中日合資の規定は、中日兩國委員の協議に依り決定すべし。但し鴨綠江採木公司天寶山銀行の慣例に依り、事務を處理すること。

3、中國政府にして前記の借款を償還すること能はざる時は、日本關係銀行の合資金と爲す。但し總額の半に及ばざる時は、日本關係銀行は隨時之を補足すである。

我等森林家は内地にのみ活動するを以て能事した様な島國根性では駄目だ。宜しく積極的に我國のものとなつた支那森林を來りて料理せよ。而して資源を開發して大支那に岐蘇魂の精子を植ゑ、支那森林は蘇門出でなくば役に立たぬと迄に基礎を作り、日本殖民の最大目的を百年の計にて建て母校をして東洋唯一の名を擔はしめよ。大陸に來りて旭の様に。

借款問題が大部彼等支那人に感じたらしいから、少しく知らせて斧を入るゝ志士の參考に供したのである。

支那紙の報する處に據れば

『吉林黒龍兩省の森林及鑛産を擔保として日本から三千萬圓を借りる、この建議者は吉林督軍孟恩遠君であつて日本の二三大實業家との間に單獨で且つ秘密に借款交渉中であつたが、地方借款でも中央政府の許可を受けなくてはならないので中央へ申請した處が農商部では大反對、奉天の張作霖督軍も同様で遺憾ながら中止となつたが、政府では調査委員を吉林省へ派遣して孟督軍と話し合ひの上中央政府に於て取り定める事として、吉林黒龍兩省から委員の來京を促し北京で協議の結果顯はれたものが即ち今回の三千萬圓借款問題である。

支那側代表者は曹汝霖總長で日本側代表者は西尾龜三とした。

之が反對者は田文烈總長であつたが曹財部總長は國務會議の席で『六月分の政費が

△松花江上流域
△牡丹江上流域
△圖門江左帶
△拘林河流域
△東清鐵道沿線
△三姓地方
であるが邦人で現在森林事業に關係して居るものは、日華合木廠・吉林採木製材所・吉林寸燐株式會社・石光洋行鴨綠江製材無...

新借款内規として借款金を以て事業經營資金に當てて、寧古塔南方鏡泊湖に注ぐ牡丹江瀑布を利用して、水力電氣を起し附近の森林を伐採して先づバルブ事業を起すのである。此事業は昨年春頃から起つて居るもので日支合辦で森林合社を組織し、鏡泊湖附近には既に準備員が派遣されてきて其緒に就いて居る。

視察雜感 宇志生
朝某ホテルを出で、舊昔所謂箱根八里を逍遙す。老松唯昔を語るが如きの外、心をなやませるものなし。轆轤の聲陋屋よりもれて、通行する人もなし。

裾野に於けるパイプの製造所を見れば原料既に缺乏を告げて遠く千葉栃木方面に之を求む。
◎手工業時代は日本も無事泰平なりき。鐵道が通せざる中は六十余州は廣漠なりき然れども機械工業、電力自在供給の機械工業の前には憐むべき島國たらざるを得ず。

◎如何に大自然の支配者も癪に障ること夥し。宮下ホテルに晝食せんとせしも大急行を以て下り去る。
◎男爵の別邸に軌り入る。
成金對成金、かゝる境域に於て特に成金の湧出を禁する能はず。馬鹿毛たる役人を廢して世の實業界に入らんとするものは、斯る時に於て其機を與へらるゝにはあらざるか。

◎今や木曾出身の者天下に瀾漫し、至る處其發展を見且つ聞くは吾人の洵に欣懐に堪へざる處、殊に師弟間の情誼と協心戮力の美風は益々其發展を期待し得る處なり。
◎梧蔭より 星 波 生
米、暴動、巡查、此んな文學が近頃俄に新聞紙上を飾様になつて勢からず人心を動搖せしめた。生活難か賢澤難か或は人心の腐敗か、幼稚な自分の知る處でない。

ある。「智者水を好み仁者山を樂む」と孔子は更に仁なるものを吾が常に敬慕する山林を結び付けた。これ何等かの暗示を意味するものではあるまいか。

●此孔子の廟が彼の曲阜と云ふ處にあることだ、此曲阜は古代神農氏が陳から移り住んだ處で、黄帝が呱呱の聲をあげた土地である。世は辯髪の胡俗化して人心は濁りに濁つたけども、洗滌の源は今尙清い。尼山は秀麗の氣を聚め、昇る孔里の烟湧き出づる顔井の泉は古の面顔をこめて居る此處に孔子手植の樹と云のがあるろうである。

●孔子と植樹——聖人を穢すの言であるとする人があるかも知れないが、其處に吾々は貴い或物を感得することが出来る。●仁義禮知信が五常であるが如く、木火土金水を五行と稱して古來樹を以て其頭首として居る。

水がエツチとオーとからなることは夢にも知らなかつた過去の時代には、木は火を生じ、火土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずと、深く信じたものである。所謂五行の説である。

●彼等古往の人々は、二宮尊徳の『父母の根元は天地の命令にあり、身體の根元は父母の生育にあり』と云つた調子で『萬物の根元樹木にあり』と云ふ觀念を有して居たのであらう。故に古代から山を祭り樹を祀

つたつてはあるまいか。●米と樹、それは余りに無關係であるか如く聞ける。而し之には密接な離るべからざる鮮血が流れていると云ふ事を誰にも悟らせたものである。

文苑

向上村へ

八月十二日、月、曇、Rちやんと二人Bさんのボートに乗り損つて二里の湖畔をテケる。因にRちやんは商業の二年Bさんは語學校の生徒である。

途中には緑深い水邊に白壁のホテルや佛蘭西大使館始め諸外人の別荘さては朱塗の立木觀音などあり水泳者の金髪美人が四五人打連れて静けき浪間に語ふも樂しげであるやがて足尾路の小徑に入るとメツタに火には會はぬ只太古の林、原始の湖てふ寂莫！静寂！の氣分には充たされる此中に唯二軒英國大使館の別荘がある、然かも路は其庭園の爲に甚しく迂廻して逼められてゐる、以て彼等の専横を知るに足る、實に癩だ元來が此地は外人を主客として居るので土民は毛唐の横行を黙つて見てゐる先づ中禪寺は毛唐の世界である。

先日或雜誌を見たら毛唐は開放的で邸宅なども日本の如き塀ではなく全部柵を廻して居るやうだ、して見ると此長い不愉快な塀は建てた日本人にも罪はある、最も是は御料

合、水浴

五時半—六時 遙拜、靜堂、朗誦
六時—朝食、七時—八時五十分講義
九時十分—十一時 講義、十二時—正午 午後の部

正午—二時 晝食、自由時間
二時—四時 科外講演、四時—六時 作業散步
六時—夕食、七時—八時感話、懇談
八時—八時半 靜坐、八時半—九時 氣合、点呼、九時 就床

右表中遙拜は伊勢大廟及田母澤御用邸に向ひ氣合は兩足を直角に擴げて丹田に力を入れ氣合を掛けて前む動作なり

渡南日記

南洋にて

古 根 勳

五月四日 暴風烈しくしん波浪高し。我將に渡南の第一歩を踏み出さんとす、嗚呼然るに此荒天とは。之天は我に對して社會の辛酸を語り人生の行路を暗示せるものか。さて今日に乗込よ、我に取りて幸か將た不幸か、印象は長へに消えざるべし。拾時のランチにて日本邦船會社の靜岡丸(五六八四噸)に至る。怒濤は益々狂ひて高く低く爲にラシチは靜岡丸に或は離れ或は打つけ其乗込の危険云ふべからず。

我等の室は參等なり。恰も蠶柵の如く、簾暗くして惡臭鼻をつき其心持の惡しき事何にか警へん。食堂は客室の中央、三等船客

の林道であらうが、……八丁出島の天幕の家に近づいた時は常に人氣のない所だけに何となく懐しさを覺れた、十幾つの民家の並んだ中を近邊の向上村役場へ足を入れる、幹事のM氏は先日偶然面識になつた人なので「意外な所で御目にかゝります」といふ傍には向上日報社、向上郵便局がある局長は誰あらうBさんである、暫らく休んで濛濛男爵の土産てふ桃の裾分けにも與つて講堂に肥田講師の強健術を聴いた天幕は前記の外、向上病院もあつた應接所、圖書館等あらざるなしてある外に賣店、寫眞屋も見えた。

歸後は偶然にも見知り船頭に「お乗んなさい」と勧められて其厚意を受けたが何時になく大に眩暈を感じた。

八月十三日、火曇。今日はRちやんとボートに帆走して再び八丁出島に向ふ、波を切つて突進するのは愉快だ、恰度肥田講師の實驗中であつた、次で蓮沼講師の『修養團の精神』と題する講演を聴く——黃石公の素書とは己を修め家を整へ國を治むる方法を書いたもの——修養とは如何？真人たるの道——真人とは如何？十已を完うし進んで人を完からしめ相共に世を完からしむる人となご有益な話であつた、假令夫がズラ辨であるとしても其熱誠は人を動かすに足る、由來東北辯には人を引付ける或物があると思ふ。

此日は偶然にも三年振でK氏にも遭つた元の荷物置場なり。荷物を一方に積み重ねて敷きて其處に一同打寄りて喫するなり。我も多勢の中に打混じて晝食了す。飯は黄色にして臭氣あり、其に唯一菜之飢を凌ぐに足るのみ。されど海外雄飛の少壯猛者連いかで此位に辟易せんや。

正午汽笛一聲天高く響くよと見る間に早や船は徐に波を蹴つて進み出しぬ。右手には須磨、明石、舞子を眺め、左手には淡路島を見送り、前面に大小幾多の島嶼を迎ふ、風烈して雨さへ加はりて寒し、甲板に居る事も出来ざれば客室に歸りて呻吟す、瀬戸内海の風光を眺めんと思ひしも夜に入りて見る能はず。舷打つ波の音を聞きつゝ、船中第一夜の夢を結ぶべく床に就く。

五月五日 朝早く甲板に出づるに緑濃き大島小島左右前後に点々たり。

潮風袂を拂ひて心地よし、暫し風光に見とれをる中船は早門司港に入る。故邦の名残に一ツ門司を見物せんとて上陸す、市街狹長にして見る所もなし。買落しの品々買求め郵便局にて手紙認め投函して歸船す。三井合資會社の竹村氏二等切符を買ひしも船室なければやむなく我等と室を共にす、一人増したるを以つて賑かになりぬ。床中にて種々の話をする中いつとはなしに眠の世界に引き入れられぬ。

五月六日 船中第二夜の夢は破れた。是は石炭を満載して二時解纜、愈々玄海灘の怒濤を蹴破せんとす。

中禪寺小學校の先生たりし人だ。

小雨の後ボートを出すと生憎又も驟雨だ。洋装美人の避難して居る出島の陰へ逃げ込んだが中々眠みそうもない般々たる雷鳴さへ加つて雨は益々烈しへなる。どうも美人連は思ひ切つてか乗出す、僕等はデツとしてゐても濡れて來るので、石傳ひに島の尖端、藥師堂まで落のびたが然し堂に入つた時はもうスツカリ、ズブ濡れであつた。中には船頭と若い男と娘とが逃込んで居た娘はY旅館のSチャンである。湖面は霧に鎖される、雷は近づく雨は愈々劇しい耳を聳せん許の大響と共に湖上に火柱を見た時ヒヤツと命拾ひした事を喜んだ。一時間餘の籠城の後、やがて小降を幸ひ飛出して手の切れる様にオールを急がした、Rチャンはシャツ裸でブルブル震へ乍ら舵を取る。漸く中禪寺に着いた時、濱邊にはRチャンの祖母さんが傘を翳して待つてゐた、R夫妻は大に冷かさうと待つてゐたが餘りの濡れ方に其氣も失せたと笑つた。

附記

南は鹿兒島より北は北海の果てより集ひ來りし所謂中堅青年は其數百七十一(内本縣五三)之を職業別にすると學生七九、教員三七、農三〇商一〇官公吏一一雜四となる是等公民の日課表を見るに左の如し

午前の部
四時半 起床、四時半—五時 点呼、氣

海國男子の發展的意氣を語るは是此航海か
船首に立ちて四顧すれば碧水浩洋として
心身頓に廣濶たり。
默想すれば常陸丸・和泉丸の昔に歸り怒は
浦艦隊の暴虐より涙は婆艦隊悲慘の全滅に
及ぶ。
赤陽將に入らんとして雲を染め美觀云ふべ
からず。客室に入りて横はる波浪の激する
音高し。
五月七日 甲板に立ちて四望するに眼をさ
へぎるものは唯雲と水のみ。
正午過砲演習あり。船客一同甲板に出づ
白烟、砲口に立ち昇るよと見る間に轟然た
る大音響と共に砲丸射出せられたり。
快―快―真に之れ血湧き肉躍る、一發又一
發身はいつしか日本海の大戦闘場裏にある
を覺わしめぬ。
一彈は遙の彼方に落ちて真白き水烟高く飛
ぶ、一同狂喜異口同音に「萬歳―」
船員等又地中海に於ける敵潜航艇遭遇の折
を相像し居るならん。
中央公論を讀みて甲板を散歩し九時床中に
入る。
五月八日甲板に出れば海水茶褐色なり偉
大なる哉楊子江の濁流より江口何十里の沖
迄海を黄化したる。宜なり高原西藏に源を
發し支那大陸を悠々東流する事一千有三百
里。吾が占守島より臺灣南端まで行くも猶
一百里不足するものなるを水量、實に世界
一にして江口を去る遠く六百里の上流、重

盗み來れば寝むること恰も鼠を捕へ來たる
猫に於けるが如し。斯は某支那通の實話な
り。
楊子江上日章旗を掲ぐる汽船多く天涯の孤
客も甚心強し。
五月九日 雨少しく降れば客室に呻吟して
雜誌にふける。甲板上には荷物積込の音と
支那人の聲にていかまびすし。
夕刻解纜貨物満載のため船足遅し。
五月十日 海水復碧、木の葉の如き漁船數
多怒濤に弄ばれつゝあるを見る。東方を望
ば渺々として水天相連る處唯一線を劃する
あるのみ。西方に眼を轉すれば雲か山か渺
として見ゆ。
夜は余興にどて浪花飾あり。余り上手なら
ねど船中生活を慰むるには充分なりし。
五月十一日 黎明甲板に上る。眞紅の太陽
煌々として我を照す。我大聲を放つて「心
の力」を讀めば波浪澎湃としてさながら和
するに似たり。
右手の方支那の山かすかに現れしと思へば
そは消れて異なる物次に現る。現るゝかど
思へば消ゆ、消ゆるかと思へば現れ恰も活
動寫真を見る心地す。
夕陽既に没して餘光雲を染め波に映するの
美觀捨つべからず。
船首に立ちて碧水碎けて玉と散る壯麗さに
見ざるゝ折から、突然大魚の飛び上るあり
非常なる快速力を以て、船の前に波を切り
て進む。快―快―七尾八尾何魚かと問へば

傍の船客イルカなりと答ふ。
既にして暗し、無數の星天に瞬く。出
五月十二日 實業之日本を讀む中知らず知
らず寝入りたり。
晝食なりとの聲に驚きて飛び起ぐ。
甲板の散歩餘り樂しからず。
夜に入りて遙かの彼方に火二ツ三ツ、漁火
ならんか。
消へ入る許りの細き弓張月中天高く懸る。
「たゞ月よ―」我知らず叫びて我聲に驚き
たり。懷郷の情津々として湧き出づ。
望郷の念の涌然たるもの豈一人阿部之仲磨
のみならんや。
五月十三日 甲板に至りて見るに船は大島
小島多き瀬戸内海の如き所を進みつゝあり
右舷近く奈良嶽草山に髣髴たる小島あり。
香港に港門二つありて、東より行くものは
鯉魚門路より入り、西より來るものは「ラ
マ」海狭より入る。鯉魚門上を仰げば香山
には砲身露出せる砲台あり。對岸の租借地
九龍半島の要塞と共に港口を扼して儼然と
して、所謂一夫關に當れば萬卒進む事能は
ざるの地なり。
十一時入港投錨す。南伯リオデジヤネイロ
濠洲シドニーに次で世界第三位の良港たる
此香港、四圍山を還らして既に天然の良港
なるに、一八四二年英國領有以來七八十年
に亘る大努力は、拓地修港遂に完成し以て
東洋一の商港となれり。
我邦の軍艦商船多く頼もしく、又愉快なり

慶迄汽船の航行自由なり。
八時半江口に達す、兩岸に初めて青々たる
草木を眺め、渴者に水の感あり。
平原に散在せる弊屋、水に浮ぶジャンク、
至乃此の水。五六十年の歴史を偲ばしめ坐
ろに老大亡國を弔せしむ。
吳淞砲臺沖より支那黃浦江に入り内外船舶
織るが如き中を進みて十一時海に投錨す。
早くも來りて物を勧むる支那人いと五月蠅
し。
上陸すれば英租界なり、往來の乗物の種類
は日本と異らず。矮少の人力車徒に多し。
弊衣破帽の限をつくし、而も洗足の支那人
無類にして不快を感ずる事甚し。
電車は少くして一二三等に分れたり。
書して曰く「穩快廉價大衆可座」と籠否は
知らざれ共穩快らしくもあらず、されど客
車満員なり。建築物の壯麗宏大なる東京銀
座に譲らず、繁華又彼の上にあらず。
三井物産會社上海支店に至り晝食を喫し馬
車と案内者とを與へられたれば市街見物に
と出かけたなり。
新公園を見、日本人經營にかゝる純日本式
六三公園を散歩し馬車を走らせて純支那町
に入る、店頭甘蔗、豚肉、鶏肉のハム多し
道路狭く突起甚しく喧々囂々いとうるさし
甚だしき不快の念をいだかしたるは物乞
の執念深き一事なり。頭髮入り亂れ身には
ボロを纏ひ臭氣芬々たるの身を以て行人の
前に跪き物を與へざる中は追ひすがりては

跪く馬車に乗りて走れば馬車に取付きて何
やらん切りに云ひて物を乞ふ。五月蠅けれ
ば何か興へて歸さんとするに案内者止めて
曰く、「若しも一人に與へんか彼等の仲間
四方より集り來る故決して與ふべからず」
と早々にして此處を去り河畔なる英租界の
英人設立の公園に至る。
日比谷公園に勝り、一等國民の外、入るを
許されず、自國領土にありながら入るを得
ざる憫なる支那人を思ふと共に、東拜久
しうして大君の御稜威に感涙暫く止らず。
されど我國の領事館を始め會社商店は多く
米租界にあり、故に當地にては日本人の權
威甚揚らすと云く。
日本郵便局に至りて通信をなし午後五時歸
船す。
歸途支那苦力の劇烈なる労働振を目撃して
日本労働者の遠く及ばざるを知りぬ。
彼等は共同の動作一致の力を缺くと雖も、
個人としての努力は感服の外なし。之をう
まく統御せば實に恐るべき勢力なるべし。
されど文明開化は依然として後退せり。彼
等は智なく徳なく錢あつて身あるを知らず
身あつて國家あるを知らざるなり。
到底此類勢を挽回し得る傾向を認むる事能
はず、確かに日一日と亡國に近きつゝある
なり。
又彼等の盜癖は殆ど先天的とも云ふべきか
彼等は盜をせざれば殆ど堪へ得ざるもの
如し。即ち盜みせざれば親、之を叱し

正午三井物産會社のランチにて上陸同會社
の社員二人の案内によりて、見物に出かく
市街は街路整然、多きは六七階の大建築
物人目を驚かし恰も歐米に遊ぶの感あり。
上海よかも清潔にして西洋色彩を帯ぶる事
甚だし。電車の二階作りなるは奇なり。
Peak Train wayに乗りてPeak山に登る。終
点よりはChairに乗りて登る。戦時なれば
頂上迄行くを禁せらる。
Peak Train wayに乗りて上下するに、恰も
飛行機に乗りて空中を飛ぶの感あり(野生
未だ飛行機に乗りたる事なけれ共)。
最大勾配四〇度なりと云ふ道路、水道に氣
狂なる英人は此山復に上等なる道路を縦横
に開き、圍らずに鐵柵を以てし、敷くに石
人造石、煉瓦、アスファルトを以てす。
又到る處ホテル、住家を建築し、絶頂には
兵營を設く。實に驚かざるを得ざるなり。
英兵の銃の擔ひ方を見るに左の肩に横にし
て擔げるは滑稽なり。
路傍の草木は悉く熱帯性なり。何れも其名
を知らず。是に至つて植物學の知識は零と
云ふべきなり。
山腹より俯瞰すれば港内市街より九龍本島
及附近の大島小島雙眸の中に集まり、眺望
佳なり。下りてボタニツクガーデンに入れ
ば、一として珍奇ならざるなし。椰子の抽
出でたるは恰も繪の如し繪葉書買はんとて
毛唐の店に入りしも、言葉の通せざる悲し
さ大いに赤毛布を擴げて五時歸船す。

夕食後甲板より夜景を眺むるに、市街は勿論山頂迄も燈光にて、其美觀筆舌の到底くす處にあらず。

五月十四日、小雨、印度人二人乗込む。正午出帆。暫くして暴風襲來、怒濤逆卷きて物凄し。

六千五百有餘噸の我靜岡丸も恰も木の葉の如く、或は呑まれ或は押上らる。激浪の甲板を洗ふ事も屢々なり。可笑しかりしは不意に圓窓より多量の海水の浸入を受け大狼狽せし事なり。

夜に入るも波風収らず、されど一人として吐瀉する人無し。床中に横になりしも中々に夢結ばれず、激浪の響愈々高し。

五月十五日、昨日來の波風全くたままる。天幕を張られしを以て甲板に出で、涼む。三時頃驟雨沛然として至り、十數分にして全く霽る。爲に熱氣大いに奪はれて心地よし。客室に寝るは餘り熱苦しければとて食堂に夢を結ぶ。夜半急雨あり、雨漏りせしため詮方なく引きはらひて我室に眠る。

五月十六日、黎明近く東天紅を呈して美し朝食を了るや暑氣漸く加はり、流汗暫くも止まらず。十一時頃より左舷近く佛領印度支那安南の山を望む。

午後一時暑氣一層加はる。三時頃涼風と共に又驟雨來りて暑氣を奪ふ船は今やカムラン灣沖を通過しつつあり、波羅的艦隊東航の昔を思ふ。事切恰も五月にして時を同じうせるも一奇なり。

一時日佛の國際をして危機に瀕せしめし此入江、灣客水態は依然として昔日の儘なれ共、春風秋雨、タイムは既に十有餘年を経て、當時の提督皆逝き艦艦亦昔日の態を止むるもの稀なりとは、如何に世の運命さば云へ一擲の涙なき能はざるなり。

日没迄波浪の未なる安南の山影遂に消えず夕陽又雲を染めて明日の好晴を語るもの如し。飛魚群の右方左方に飛ぶを見る。

夜遙かに燈火見ゆ早や「船一船」と呼ぶ聲すと見ると彼我の船しきりに電光信號を始めたなり。何を語るや、五月十七日、朝食を喫して甲板に出で、「急がば廻れ」を讀む。

夜は一同船首に至りサイダーを傾け「五年後の歸國の際は何かにせん」「我は斯せん」等語らひて打ち笑ひたり。

偶々印度人來る。「君は英國を好むや」と問ふに「私は英國を好まず、大いに日本が好きなり」と又曰く「我先年横濱に居る時雪降りて始めて雪と云ふものを見たり。甚だ白くて美し、されど甚だ冷たし。雪だるまも見たり」等云ひて喜ぶ。

彼等はセイロン島の者なりとしきりに印度語にてシヤカの歌を歌ひて、英語にて説明すれども如何せんわからざりき。上弦の月天心にあり。眠を取るべく十時船室に行く。五月十八日、豪雨沛然たり。甲板に出づる

事も出來ざれば室内にて讀書にふける。四時頃乗客の點檢あり。如何がはしき密航者もありたる模様なり。

上陸の支度を終りて、甲板に昇れば風颯々と橋索に響きて浪聲一段高く、月は舷頭に牙へ雄壯なるクネーの前途を照らす、二週餘日の航海も今宵のみと思へば、歡待優遇はせられざりしも流石に見捨てがたく靜岡丸前途の航海安全なれかしと祈る事多し。

五月十九日、早朝起床、甲板に出でしも未だ薄暗し、東天漸く紅を増し、眞紅の大陽忽然として現はる。右手に横はるは之れ馬來半島なり。

七時頃より新嘉坡を望む。紅白の建築太陽の光に照らされて美はしく、公會堂の高塔も綠樹の上に突き出でて見ゆ。一同の歡喜云ふべからず。八時頃港外に投錨旅行券の檢査あり。一同早く上陸し度しと思ふ時事務長曰く「諸君等は傳染病流行地たる神戸を發し、又香港に寄港したり。依りて直に上陸せしむる事能はず。一旦セントゼームス島に到り消毒の上新嘉坡に上陸すべし、荷物は棧橋に置くにより取りに來るべし」と一同ハット思へど詮方なし。

英國ランチに乗りて離れ小島セントゼームス島に移されたり。セントゼームス島に至りての有様は又折を見て林友誌の片隅を繰さん。

俳句

戊午盛夏駒場入學許可の官報を見て
○入選の御沙汰かしこむ扇子かな
○終電にぶら下りけり夏の夜半
○大刀の血糊洗ふや岩清水
○謎解けて笑聲高し涼み臺
○夏月に勝を祝ふや草むしろ

學校便り

○盛岡農林生來校、盛岡高等農林學校林科生二十余名は上村教授に引寄せられ修學旅行の途次七月十六日本校を訪問し標本室其他を視察せるが一行中の庭球選手は豫て試合を本校庭球部に申込みありしを以て同日午後本校々庭に於て數番の試合をなせり
○登山延期、夏季實習後の御嶽、駒岳登山は本年は脚氣病に罹れるもの非常に多きを以て夏季休業後に延期する事とせり
○終業式、七月廿八日は朝より校内の大掃除を行ひ十時終了直ちに講堂に參集、校長より一場の訓話ありて閉式、生徒は大抵同日歸郷の途に上れり
○塚越教諭出張、塚越教諭は八月一日より英語講習の爲輕井澤に出張を命せられ全十五日歸校せられたり

會員消息

○松嶋周一君、七月初旬荻原森林測候所に轉任せられたり
○唐澤繁夫君、七月初旬北海道夕張帝林局出張所に赴任せられたり
○野知里慶助君、豫て駒場農科大學實科受験の爲上京中なりしが今回首尾よく好成绩を以て入學せられたり
○加茂憲太郎君、岐阜縣莊川小林區署管内白川村鳩谷保護區官舎詰を命せられたり
○大澤國男君、六月末一身上の都合に依り白田測候所を辭し郷里に歸省せられたり
○征矢朴郎君、臺灣大實農林部に在勤の同氏は今回朝鮮京城の同部に勤務することとなり、四十日の休暇を得て一旦歸郷せられたり
○市岡正茂君、七月廿四日付岐阜縣林業技手に任せらる
○飯沼要人君、高崎小林區署を辭して上京日本力行寮に在りて勉強中將來は海外雄飛を試みる志望なりと云ふ
○長坂清人君、七月中高等學校入學試験を受けられし處首尾合格、第四高等學校第三部に入學せられたり
○由尾忠輔君、上松出張所へ轉任せらる
○千村重喜君、柿其分担區へ轉任せらる
○奥原吉右衛門君、阿寺分担區へ轉任せらる
○倉澤建雄君、瀬戸川分担區へ轉任せらる

會員の訃

○第十一回卒業生岩瀬幸吉君は豫て病席中の處藥石効なく七月十八日永眠の趣令兄より通知ありたり本會は茲に謹みて哀悼の意を表す
學校及び本會宛暑中見舞狀を寄せられたる諸彦左の如し此に謹んで謝意を表す
萩原惠治君、小林哲三君、原川只一君、北川壽君、德弘正夫君、加茂憲太郎君、宮嶋岩見君、近森良材君、廣瀬運平君、宮田實君、安藏清吉君、伊藤俊夫君、和田常次郎君、千村彌之助君、中田辰雄君、小羽根安次君、細江七兵衛君、出雲秀一君、伊深幾太郎君、平田久良治君、山本茂君、可兒敏郎君、瀧美雄君、岡西猛君、不免修六君、梅村計介君、新田穰君、飯沼要人君、德武國久君、安地又四郎君、青木忠太君、各務傳六君、右山五八君、長田克巳君、恩田司馬之助君、柳澤義雄君、榎山節男君、山下不二三君、鹽川金兵衛君、村松一郎君、箕部覺明君、藤原幾喜君

オリツピング競技用

運動器具購入

今回運動會殘金及び川崎氏寄附金を以て左の通り運動器具を購入せり

記

金壹圓五拾壹錢 大正五年度運動會殘金
 金拾參圓參拾錢 全六年度運動會殘金
 金拾圓參拾錢 川崎氏寄附金
 計金貳拾五圓拾壹錢

支出

金六圓 十六ポント砲丸壹個
 金五圓五拾錢 十二ポンド砲丸壹個
 金六圓五拾錢 正式圓盤 壹個
 金參圓 正式ジャブリン一本
 金壹圓貳拾五錢 高飛用竹棒 一本
 四拾參錢 運賃
 金六錢 送料
 計金貳拾貳圓七拾四錢
 殘金貳圓參拾七錢

林友代領收報告

金貳圓 藤卷壽一君
 金參圓 太田喜代松君
 金貳圓七拾錢 宮城忠藏君
 七拾貳錢 岡田恒治君
 金壹圓 由尾忠輔君
 金壹圓五拾錢 志津幸祐君
 金貳圓 吉田精一郎君

謝恩金領收

内藤先生の分

金五圓

渡邊知則、赤羽高此

池田仲治、下平佐門、岩井洋治、以上五君

金壹圓

金貳圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金貳圓

金壹圓

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金五拾錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金參圓

金壹圓

事

北村先生の分 田中泰吉君

金五圓

金壹圓

金貳圓

金四圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金貳圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金貳圓

金壹圓

金壹圓

金壹圓

金五圓

金五十錢

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

定價部參錢

塚田大、三君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

小羽根安次、細江七兵衛

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

松尾廣次君、二木季人君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

安江悦次郎君、市岡正茂君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

坂本光太郎君、市岡淳一郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

塚本三樹君、米山修君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

池口福雄君、松本清太君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

岡西猛君、久保田吾良君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

中田穰君、樋口徳一君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

加藤源一郎君、萩原恵治君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

出雲秀一君、都竹武次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

石坂秀治君、佐々木久一君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

唐澤繁夫、矢崎清海、高峯信治、各務信六、拓植五郎、以上五君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

岩井洋治、以上五君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

征矢野余所夫君、村上英勇君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

渡邊知則、赤羽高、池田仲治、下平佐門、岩井洋治、以上五君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

山崎三男君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

多田慶次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

山崎三男君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

多田慶次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

山崎三男君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

多田慶次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

山崎三男君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

多田慶次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

山崎三男君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

多田慶次郎君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

田中泰吉君

金壹圓

金五十錢

金壹圓

金壹圓

金壹圓

大正七年八月廿三日印刷

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 安井正夫

長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地 川崎印刷所

印刷所